

仙台伊達文化の会く仙台藩の茶道と能楽(乱舞)



仙台藩茶道石州流清水派

御 供 真 人

元日の能登半島地震でお亡くなりになられた方々のご冥福をお祈りいたしますとともに、被災された皆さま方に心からお見舞いを申し上げます。

筆者も一月前半、職場より先遣隊として金沢市へ派遣され、輪島市からの被災者を一時的に受け入れる避難所の開設、被災者の受入れ及び避難所の運営等の支援に従事いたしました。今後も一日も早い復旧、復興の支援に微力を尽くしてまいります。

なお、石川県は金沢藩百万石の伝統文化が今なおいきづく、茶道や能楽が盛んな土地です。輪島塗で有名な輪島市等奥能登は、今回大きな被害を受けました。茶道関係者は、茶道具の購入といった形で被災地支援も可能であると考えております。

今に伝わる本物の仙台伊達文化くお茶とお能をお気軽に

令和五年(二〇二三)六月四日、青葉城本丸会館において、政宗公ワールドプロジェクト主催、仙台伊達文化の会共催の企画「今に伝わる本物の仙台伊達文化くお茶とお能をお気軽に」が開催されました。(図1)

茶道と能楽は武士にとって必須の教養でした。仙台藩でも「茶道頭」と「乱舞方」という役職がありました。それを代々勤め、令和の現在に至るまで変わらず受け継ぐ「仙台藩茶道石州流清水派宗家」と「喜多流佐藤家」が、お話と実演を交えて、仙台伊達文化を紹介する内容で、仙台市民や観光客等多くの方がお越しになりました。

今に伝わる本物の仙台伊達文化

お茶とお能をお気軽に

武士の教養である茶道と能楽。仙台藩の公式な役職である「茶道頭」と「乱舞方」を代々勤め、今に変わらず受け継ぐ「仙台藩茶道石州流清水派宗家十一世大泉道隆」と「喜多流佐藤家十二代佐藤寛幸」が、お話と実演を交えて、仙台伊達文化をご紹介します。気軽に本物に触れるチャンスです。

とき: 令和5年6月4日(日)

ところ: 青葉城本丸会館2階 仙台市青葉区仙台北本丸

第1部: お茶 13:30~14:30 お能 14:30~15:30

第2部: お茶 16:00~17:00 お能 17:00~18:00

お抹茶とお茶菓子が出る有料席(事前予約可・500円・第1部・第2部各限定40席)と見学だけの無料席。

アクセス: 地下鉄東西線「国府センター駅」より徒歩約15分

るーぷる仙台 仙台駅南バスプール「西口」バスプール16番のりばより20分「仙台城址」で下車

お車でお願いの際は仙台城址有料駐車場をご利用ください 料金: 夜初 1時間 600円 以降 30分 300円

主催: 「政策プラットフォーム」プロジェクト共催 仙台伊達文化の会
問合せ予約 TEL: 022-227-7071(仙台市 青葉区科振推進課 本丸)
Facebook <https://www.facebook.com/profile.php?id=1006667210222>

図1 「お茶とお能をお気軽に」チラシ

政宗公ワールドプロジェクト

主催の政宗公ワールドプロジェクトは、「伊達政宗公生誕四百五十年」を迎えるにあたり、関係する各団体と各地域が一同に会し、「伊達な文化圏」の新生と、「観光産業」の新たな展開をスタートさせる市民主体のプロジェクトです。

仙台伊達文化の会

仙台藩の茶道頭および乱舞方を勤め、現在も変わらず仙台伊達文化を継承する仙台藩茶道石州流清水派宗家および喜多流佐藤家により、令和二年（二〇二〇）に設立されました。

令和三年（二〇二二）八月八日から九日、新型コロナウイルスの影響で失われている伝統文化に触れる機会を回復するため、小学生、中学生、高校生向けに能の仕舞及び謡、お茶、お花をひとつの会場で体験できる「古の文化に触れる夏休み」を仙台国際センター展示棟（仙台城水沢伊達家屋敷跡）で開催しました。

「今に伝わる本物の仙台伊達文化」お茶とお能をお気軽に」は、仙台伊達文化の会として2回目の企画となります。

仙台藩茶道 石州流清水派

講師の仙台藩茶道石州流清水派十一世宗家大泉道鑑先生は昭和十七年（一九四二）、十世宗家大泉道鑑先生の次男として生まれ、石州流清水派の茶道を十世宗家道鑑先生に師事、平成二十二年（二〇一〇）十一世宗家を継承されました。

東北大学名誉教授、茶の湯文化学会会員、仙台藩志会副会長、政宗公ワールドプロジェクト理事、仙台伊達文化の会共同代表を勤め、また、流祖三世道竿著「道竿拾牋」および家伝の二世動閑著「動閑茶湯書」のうち「露地之書」「茅葺数寄屋寸法」を、十世道鑑と共著の論文にまとめ「茶の湯文化学」に発表。未公表の「動閑茶湯書」の解読研究でも活躍されておられます。

大泉宗家から、茶道の歴史と、仙台藩の茶道について、四代藩主綱村と茶道頭三世清水道竿が仙



図2 十一世大泉道鑑宗家の講演



図4 金城道里教授の手前



図3 亀田道治師範の手前

台藩の茶道として石州流清水派を確立し、代々の茶道頭（明治以降は宗家）が仙台の茶道を守り伝えてきた歴史を講演され、その後、亀田道治師範と金城道里教授による、仙台城で行われていた時と変わらぬ手前が披露されました。

能楽 喜多流佐藤家

講師は、喜多流職分佐藤家十二代の佐藤寛泰先生です。政宗公が幕府より蟄居を命じられた流祖喜多七太夫長能の窮状を救い、二代藩主忠宗が一時、二世喜多十太夫当能を家臣として召し抱える等、仙台藩は喜多流の成立と深いかわりがあります。

また、江戸時代は十万石以下の大名では能は出来ないと言われる中、仙台藩では喜多流のほか五代藩主吉村が、大蔵家の金春流をもとに創った独自の流儀である大蔵流（金春大蔵流とも）の二流儀を抱えておりました。仙台藩伊達家と同様、肥後熊本藩細川家は喜多流と金春流、筑前福岡藩黒田家は喜多流と観世流、長州萩藩毛利家は喜多流と宝生流等、豊臣恩顧の大大名は喜多流ともう一流儀を抱える例が見られますが、藩主が茶道は石州流清水派、能楽は大蔵流と独自の流儀を創るところは仙台藩の特長といえましょう。

仙台藩では、能楽を乱舞（らんぶ、又はらつぶ）と呼び、藩の役職として「乱舞方」がありました。喜多流職分家である佐藤家は初代文十郎以来、代々大番士乱舞方として勤め、東北では唯一江戸時代から続く能楽師の家として、仙台的能楽を守り伝えてきました。佐藤家が乱舞方でありながら大番士であったのは、乱舞頭の櫻井家（大蔵流）、小野家（喜多流）と同様に、藩主指南役である仕手役を勤めていたためと考えられます。ここで、佐藤家歴代を簡単に紹介します。

○初代 文十郎章之

寛政三年（一七九一）、仙台藩喜多流乱舞頭の小野氏五代清太夫成従が遠島に処せられた時、代って「その身一代」仕手役（藩主の指南役）を命ぜられて仙台藩の喜多流を統率しました。以後佐藤家は仙台藩大番士の身分で、喜多流乱舞方として仙台藩の喜多流の中枢を担い、明治維新後も旧仙台藩内の喜多流を統率して現在に至ります。

○二代 七之進章達 文太郎

初代文十郎の長子。喜多流乱舞頭小野氏へ養子となり、文化五年（一八〇八）六世を継ぎました。文政元年

（一八一八）、仙台藩十代藩主伊達齋宗より側近に侍する事を命ぜられています。藩臣の門弟非常に多く、指導も熱心で幾多の優秀な門弟を出し、幕末の名人と称され且つ人格高く、藩主の褒賞贈物枚挙に暇無しであったと伝えられています。

○三代 大之進章永

初代文十郎の次子。六歳の時父に死別して母に育てられ、長じて喜多流宗家健忘斎古能について修業しました。文化五年（一八〇八）兄七之進が小野氏を継ぐと同時に佐藤家を相続し、父に引き続いて「其身一代」仕手役を命ぜられ、文化十四年（一八一七）十一月、仙台藩十代藩主伊達齋宗から親孝行を以て表彰されました。大之進は名人の名をうたわれ、弘化元年（一八四五）の「仙台高名見立」に「乱舞は佐藤」とあります。

○四代 十之進章厚

三代大之進の子。父に引き続いて三代にわたり仕手役として活躍し、孝行で表彰されています。

○五代 大之進

四代十之進の子。父祖以来三代にわたり孝行で表彰を受けました。仙台藩登米領にも指導に来たとの記録があ

ります。

○六代 文十郎成章

五代大之進の子。慶応元年（一八六五）、三十四歳の時に各役者が幕府に提出した分限短冊（国立公文書館蔵）に名前が見えます。また、明治初年（仙台伊達家が二十八万石となっていたため、戊辰戦争後と見られる）の彦根藩の喜多文十郎の書付にも、名前があります。この書付には、仙台（伊達家）佐藤文十郎のみならず、黒田（福岡藩）梅津源蔵（只円）、肥後（細川家）友枝小膳といった、喜多流能楽師の名前が見られます。仙台を本拠に中尊寺へもよく行き来し、装束を貸す等して親密な関係で稽古をつけていたとのこと。廃藩後は士族として警察官になりました。

○七代 大之進相章

六代文十郎の子。廃藩後は鉄道に勤めました。

○八代 章

七代大之進の次子。明治三十年（一八九七）生まれ。明治四十五年（一九一二）十四世宗家喜多六平太に入門。大正十二年（一九二三）の関東大震災の折、当時内弟子の章先生が猛火を冒して流祖喜多七太夫長能、および

十二代喜多六平太能静の肖像画、能面を救い出したことは、よく知られた武勇伝です。初シテは「岩船」で、以来「翁」「猩々乱」「綾鼓」「道成寺」「望月」「石橋」「正尊」等を舞い、特に猩々乱は名手であったと伝えられています。喜章会を創立されて門下の教授にあたり、また、震災後の混乱もおさめた大正十三年（一九二四）に早稲田大学喜多会を創立されて学生の育成に努め、喜多流職分の元老として、長く十五世喜多実宗家を支えられました。

○九代 泰文

八代章先生の長男。若くして戦災で亡くなりました。

○十代 章文

八代章先生の次男。若くして戦災で亡くなりました。

○十一代 章雄

八代章先生の孫。昭和二十三年（一九四八）生まれ。昭和二十八年（一九五三）「自然居士」の子方で初舞台、以後十五世喜多実宗家の内弟子として研鑽をつみ、「猩々乱」「道成寺」「翁」等々の大曲を披かれました。八代章先生の後を継ぎ、地盤である東北各地で主に喜章会の弟子の指導にあたり、また、早稲田喜多会等の学生の指導

等、能楽の普及に尽力して来られました。重要無形文化財保持者（総合認定）・日本能楽会員・能楽協会会員・十四世六平太財団評議員・喜章会主催。現在も喜多流職分として活躍されておられます。

○十二代 寛泰

講師の佐藤寛泰先生は昭和六十一年（一九八六）に十一代章雄先生の長男として生まれ、喜多流の能楽を十一代章雄先生、人間国宝友枝昭世先生に師事されました。昭和六十三年（一九八八）独吟「老松」にて初舞台、平成元年（一九八九）能「隅田川」にて初子方、平成七年（一九九五）能「経政」にて初シテ。以後「猩々乱」「道成寺」「石橋」等の大曲を披かれました。現在、能楽協会会員、十四世六平太記念財団評議員、「佐藤寛泰之会」「寛松会」主宰、山梨学院大学ICLA非常勤講師、仙台



図5 佐藤寛泰先生の講演



図6 佐藤寛泰先生の仕舞「八島」

伊達文化の会共同代表を勤め、また、仙台、東京、岩手、甲府、米子等の寛松会や早稲田大学・山梨学院大学の能楽サークルで弟子や学生の指導にあたっており、特に仙台では、毎月の仙台寛松会のほか、「能への誘い」公演や体験講座、宮城学院女子大学、東北大学、東北学院大学での講義等で活躍しておられます。佐藤先生は講演の後、源義経を主人公とした「八島」の仕舞を披露されました。なお、地謡は筆者が勤めました。

茶道石州流と能楽喜多流

茶道の石州流、能楽の喜多流は、特に武家の風格が強い流儀です。そこで、この両者を採用している主な大名家を調べました。北より順に、現在も石州流茶道を伝える全日本石州流茶道協会の会派とともに記します。

弘前藩津軽家

仙台藩伊達家

水戸藩徳川家

彦根藩井伊家

津藩藤堂家

紀州藩徳川家

松山藩松平家

土佐藩山内家

福山藩水野家

広島藩浅野家

長州藩毛利家

福岡藩黒田家

柳河藩立花家

熊本藩細川家

仙台藩茶道石州流清水派、石州清水流

石州流茶道水戸何陋会

彦根一会流

土佐石州流清水派

仙台藩伊達家と柳河藩立花家

柳河藩立花家は仙台藩伊達家と関係が深い大名でした。仙台藩祖伊達政宗公と柳河藩祖立花宗茂は、永禄十年（二五六七）生まれの同い年。戦国大名の生き残りで、茶の湯や能楽も当代一流の文化人であったことも共通しています。

利休七哲としても知られる大名細川忠興が、息子で後に熊本藩祖となる細川忠利に送った書状には、

「立飛（立花宗茂）殿、又その方書中具（つぶさ）に見申し候、かような事、あなたこなたと候へばすき（数寄）存ぜざる者は何かと申す物に候間、飛州（立花宗茂）御存分の通一段然るべく候、その分に任せられ、重ねてより、さたこれ無き様に仕まつらるべく候」

すなわち数寄＝茶事については、宗茂の存分に任せるべきであるとなり、また、寛永期後半頃、三代將軍家光の能についての書状には、

「次に、江戸にて御能切々仰せ付けられ、水戸殿（徳川頼房）、加式部（加藤明成）、毛利甲州（毛利秀元）、有馬玄番（有馬豊氏）（の）わき（脇方）、政宗（伊達政宗）の太鼓、飛驒殿（立花宗茂）の狂言、いずれもたぐいなき御

慰たるべしと存じ候」

とあることから、宗茂が茶の湯にも能楽にも優れた大名として知られていたことが分かります。

また、宗茂は甥にあたる三池藩主立花種次の子を養女として迎え、宗茂没後ですが、政宗公の子で二代藩主忠宗の弟にあたる伊達兵部大輔宗勝の継室となりました。この縁組は寛永期に政宗公と宗茂が茶道や能楽によって交誼を深めた反映と云えましょう。

二代目同士は更に関係が深まります。正保元年（一六四四）、二代藩主忠宗の娘、鍋姫が二代藩主立花忠茂の継室として嫁ぎ、翌年三代藩主となる立花鑑虎（あきとら）が誕生します。その後仙台藩では、鍋姫の弟、忠茂の義弟となる伊達綱宗が三代藩主となりますが、万治三年（一六六〇）に綱宗隠居事件が起こり、忠茂は親類大名の中心として幕閣と伊達家の間を周旋し、事態の解決に尽くしています。

なお、立花家には忠茂が政宗公の所望により能を舞い、その時に政宗公から拝借した能装束をそのまま持ち帰ったという伝承がある「松島」と呼ばれる唐織（御花史料館所蔵）が残っています。また、鍋姫の輿入れ道具として、多

量の能道具が運ばれたとの伝承も伝わっています。ただ、能装束は絹で出来ておりますので、長い年月の中で風化してしまします。現存する「松島」も江戸後期のものと推定されており、写しとして制作されたものと考えられます。

柳河藩の茶道方（茶道坊主）と能方（役者）

江戸後期の柳河藩の職制を記した「柳河藩政一班」によれば、

「茶坊主 城中殿中ノ使役ニ供ス。又花ヲ生ケ、茶ヲ立ル等ヲ職トス。奥坊主、表坊主等ノ区別アリ。針療医師中ヨリ一人、此ノ茶道頭ニ任セラル。茶道坊主ハ身二十徳ヲ著ケ、一刀ヲ佩ヘリ。」

「役者 能楽一切ノ事ヲ管掌ス。喜多流ノ謡曲、及太鼓、小鼓、笛等渾ヘテ練習ス。又平日ハ家老、中老ノ詰所ニ出テ、給仕ヲ勤ム。又、侍ノ内ニ御能方アリ。其支配ヲ受ク。」とあり、茶道頭は医師、能方は士分が勤めることが分かります。

また、幕末の文久元年（一八六一）の「侍帳」や「列並諸役人帳」には、御茶道方として緒方守敬や大城林安等、御能方として椿原庵等の名が見えますが、詳しい伝系等は

不明です。ご存じの方がいらっしゃいましたらご教示ください。

柳河藩茶道方

ここで柳河藩の茶道方について興味深い記録を紹介します。ひとつは「水」について。明和二年（一七六五）は渇水であったのか、度々城堀の水が濁り、藩主家が使用する「御前水」の確保に支障をきたしたことから、瀬高（柳川東方の矢部川沿いの地名）から水を汲み寄せたいとの願いが出され、御花畠御用懸中老より「御前水」であるため茶道方へ汲み寄せの指示が出されています。

このことから「御前水」は通常柳河城の堀から汲んでおり、それを差配したのが茶道方であることが分かります。筆者が関三十二号で述べたように、城中の水の手の管理が茶道の役割のひとつであることが、柳河藩の記録からも明らかにになったといえましょう。

もうひとつは「開運」について。柳河藩の節分の行事では、七つ半（午後五時）頃、藩主は供揃えをして日没前に帰城し「鬼豆御祝」を行います。その後、山王宮に参詣し、山王宮の神護寺である最勝院に六つ半（午後七時）頃に入

り、ここで進上物の披露がなされ酒宴が催されます。酒宴が終わりに近づく、茶道方が縁際で両手をパタパタと叩き、鶏の鳴き真似をします。これが節分の儀式終了の合図で、藩主は祝宴の膳等はそのままにして城へ戻ります。この風習は柳河藩特有のものです。

立花家では、藩祖宗茂が関ヶ原合戦で西軍につき、改易となつて浪人中に江戸浅草の日音院に仮寓していた時の事。実際は慶長九年（一六〇四）に本多忠勝の推挙で江戸城に召され、家康から御書院番頭（將軍親衛隊長）として五千石の旗本となつていたのですが、改易後に大名に復帰することは並大抵のことではありません。折しも慶長十一年（一六〇六）正月二日は節分の日にあたり、日音院の院主が宗茂の開運を記念して小宴を開きました。この時將軍秀忠の側近土井利勝により奉書が到来して、翌三日に宗茂は江戸城に登城することになりました。日音院で一番鶏の鳴き声を聞いて登城した宗茂は、將軍御前へ召され、奥州南郷（棚倉）に一万石を与えられ大名に復帰した、という吉例によつたものと伝えられています。

益田理君

最後に私事乍ら、早稲田大学喜多会の後輩であり畏友でもあった益田理（おさむ）君について紹介させていただきます。

早稲田大学では当時、シテ方四流にワキ方一流、狂言方一流の六つの能楽サークルがありましたが、益田君は、生まれは広島の実、育ちは山口で、先祖代々のお墓は九州柳川にあり、すべて喜多流であるということで、自ら早稲田大学喜多会に入会してきました。

益田君は博覧強記で、本稿の柳河藩の故事は、彼の蘊蓄話をもとに柳川古文書館で史料を確認したものです。

令和四年（二〇二二）九月初分、夜嵐の中、ご家族より益田理君が帰天したとの悲報が入りました。大学でも、卒業後も一緒に稽古してきた弟のような存在であり、真面目で博学で理屈っぽい律儀者、弱者への優しさと独特のユーモアで皆から愛される男でした。大学卒業後は官僚として国に奉職し活躍する中、病により四十七歳の若さで旅立ちました。

亡くなる前年の令和三年（二〇二二）十月二十八日、急に仙台を訪ねてくれ、筆者が三十年近く行きつけにしてい

る店で盃を交わしたのが、最後に会って語り合った時間となりました。

令和四年（二〇二二）三月十六日夜の福島県沖地震（最大震度六強）の翌早朝に、筆者あてに送ってくれた、無事を祈り災害対応を慰労するメールが、最後の連絡でした。その時には病苦と戦っていたと後から知り、以前、筆者が手術で入院した折、見舞いに来てもらうことを遠慮し友人知人に知らせなかったのを、益田君が

「御供さんは心配かけたくないのと、弱った自分を見せたくない性格ですよ。分かります。」

と苦笑いしていたことを思い出しました。

筆者に何かあった時は益田君に後事を託すつもりでしたが、先立たれたことが今でも信じられません。

能楽は、め度たいことも悲しいことも表現できる芸能です。葬儀ではご家族から出棺の手向けにと、故人を弔う「融」のキリ（最後の部分）を謡わせていただき、ご親族とともに火葬場で収骨まで同行させていただきました。

令和四年（二〇二二）十一月二十日、喜多六平太記念能楽堂で喜多流佐藤家社中の喜章会大会において、佐藤先生のお許しを得て早稲田大学喜多会関係者による「故益田理

氏追悼連吟 天鼓」を奉げましたが、皆で益田君も一緒に謡っていたようだと感じておりました。

ご家族のご厚意により、令和五年（二〇二三）九月二十三日、柳川の菩提寺での一周忌法要に参列、墓参させていただきました。

仙台に帰る前に立ち寄った柳川藩主立花邸御花の庭園松濤園は仙台から嫁いだ鍋姫の没後、息子の三代藩主鑑虎が、母の霊を慰めるために故郷の松島を模して作った庭園が始まりとのこと。

私も大広間の縁際より松濤園を眺めつつ、益田君の「いや、いろいろと、すみませんね」といつもの照れ隠しに苦笑いする面影を偲び乍ら、松島の月を題材とする謡曲「融」のキリを手向けに謡い名残りを惜しみました。永遠の安らぎのうちに憩われんことを祈ります。



図8 学生時代



図7 益田理氏



図10 高砂の仕舞



図9 高砂の謡



図12 筆者の妻の宿、大平温泉滝見屋
(山形県米沢市) にて

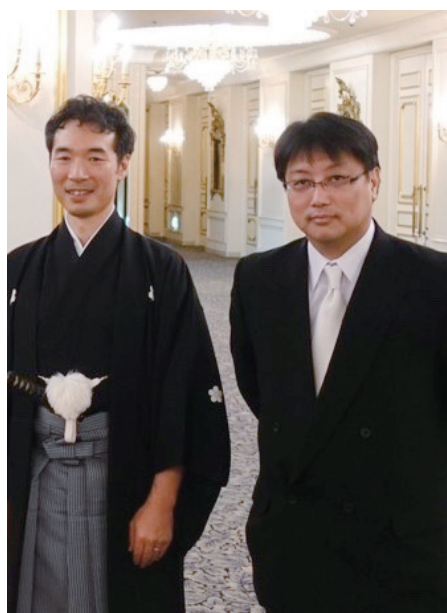


図11 筆者の結婚式にて

此の光陰に誘はれて
月の都に入り給ふよろほひ
あら名残惜しの面影や
名残惜しの面影



図13 柳川御花松濤園

(能「融」より)

追記

三月前半、再び金沢市へ派遣され、広域避難所運営支援のほか、輪島市、珠洲市、志賀町、内灘町に派遣している職員や現地の状況確認等に従事いたしました。能登地方は道路、土砂崩れ、上下水道等の復旧や倒壊家屋の撤去等が進んでおらず、未だ支援が必要な状況です。



図14 輪島朝市跡（令和6年3月9日の状況）

毎日の業務が終わる頃には店舗は閉まっているため、帰る際に金沢駅構内の漆器店で探したところ、震災で輪島塗の茶道具の入荷がないとのことで、店頭の飾り棚に展示されていた、本店の蔵に眠っていたという茶杓（図15）を購入いたしました。



図15 輪島塗茶杓 清山作
金地高台寺蔭絵

震災からの一日も早い復興を願うとともに、いずれまた金沢や能登地方を訪れ、輪島塗等をゆつくりと見て購入すること、聊かなりとも被災地の伝統工芸復興の支援にも貢献できればと考えております。

参考文献（五十音順）

『関三十二号』御供真人「仙台城茶室「残月亭」と武家茶道の茶室考」 令和四年（二〇二二）

『喜多流の成立と展開』表章 平凡社 平成六年（一九九四）

『清水動閑註解石州流三百箇條付仙台藩茶道』十世大泉道鑑 昭和五十五年（一九八〇）

『仙台市史資料編9 仙台藩の文学芸能』仙台市史編纂委員会 平成二十年（二〇〇八）

『仙台藩能楽史』三原良吉（宮城県史14文学芸能篇所収）

昭和六十二年（一九八七）

『立花宗茂』中野等 吉川弘文館 平成十三年（二〇〇一）

『能の今昔』野々村戒三 昭和四十二年（一九六七）

『福岡縣史資料第二輯』福岡縣 昭和八年（一九三三）

『昔がたり とよま能』高橋哲郎 昭和五十八年（一九八三）

『柳川市史別編 図説立花家記』柳川市 平成二十二年

（二〇一〇）

『柳川の歴史5 柳河藩の政治と社会』白石直樹 柳川市

令和三年（二〇二二）

『柳川の歴史6 近世柳川の武家文化』中野等 柳川市

令和五年（二〇二三）

『柳川文化資料集成 第三集』柳川市史編集委員会 平成

十年（一九九八）

『柳川文化資料集成 第三集 柳川の美術Ⅱ』柳川市史編

集委員会 平成十九年（二〇〇七）